ポケットモンスター　ALL TYPE

七竹真

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「行こうぜ、ヒノタロー！」

「ヒノ！」

この少年、ワカバタウンのエンカ。そして相棒のヒノタロー。彼らは、今から旅に出る。全てのポケモンをその眼に焼き付ける旅に。

「フッシー、君に決めた！」

「じゃあ俺は、ヒトカゲだ！」

ここは、マサラタウン。フシギダネを選んだ少年・レッドとヒトカゲを選んだ少年・グリーンは、青と黄色の少女と共に数奇な運命に導かれていくのだった。

「行くよ、チルル！」

「ルット！」

ここはカイナシティ。チルットのチルルを連れ、その少女・ルチアは、トップコーディネーターへの道を歩み始めた。彼女の叔父を超えるために。

「くそ、エンカのやろー俺を超しやがって！最強になるのは、俺なのに！」

再度、ワカバタウン。この少年はエンカの幼馴染・イブシ。

「ワンニャ！」

そう声をかけたポケモンは、ワニノコのクロコ。彼らは、最強を目指す1歩を踏みしめた。

「どうしたんだい、ムクホーク？」

「ホー――――！」

ここはトバリシティの育て屋。青年は、急に雄たけびを上げたムクホークに不審に思う。青年の名前はレイジ。ポケモンマスターになるべく、各地方を回っているトレーナーである。彼らが、強運の持ち主に吸い寄せられていく日もそう遠くはないはずだ。

「メガぴょん、どうしたの？」

「チコチコ」

ツインテールに黄色い帽子を被った少女・クリス。彼女もまたワカバタウンから旅に出るのであった。幼馴染み二人を追いかける旅に。いずれは2人に並ぶために。

「ミルちゃん！ころがるや！」

「ミール！」

ミルタンクの攻撃が、ピジョンに当たる。

「ピジョン！」

「ピジョッ！」

効果抜群のダメージを負ったものの、まだ大丈夫なようだ。

今、戦っている2人はコガネシティの新人トレーナー・アカネとキキョウジムのジムリーダーの息子であるとりつかい・ハヤト。いずれ、ジョウトの未来を背負う者たちである。

「おーい、ストライク～！」

虫取り網を振り回し、自分の相棒の名を呼ぶ男の子。名をツクシといった。

「トライッ！」

「いたー！」

彼もまた、ジョウトを背負う運命を持つものであった。
あと数年後には、ピカチュウとともにあいつが、彼らが、彼女たちが旅立つ時代。これは、そんな世代のエンカとその仲間、後輩に先輩、全ての人々が織りなす不思議な不思議な世界の物語。
※あくまでタグは時代です。他の地方に行くのは先になります。

目　次

第１章　旅立ち
ポケットモンスター　ＡＬＬ　ＴＹＰＥ　登場人物紹介（１章～旅立ち～編）　―――――――――――――　1
１話　ｖｓヒノアラシ～仲間との出会い。新たなる旅立ちの始まり～　―――――――――――――　5
２話　ｖｓオタチ～タマゴ、ゲットだぜ！～　―――――――――――――　10

第1章　旅立ち

ポケットモンスター　ＡＬＬ　ＴＹＰＥ　登場人物紹介（1章～旅立ち～編）

エンカ…ワカバタウン出身のポケモントレーナー。特性強運なんか目じゃないほどの強運の持ち主。色違いや隠れ特性は当たり前、伝説や幻のポケモンにもわんさか会える。クイックボールの確率がハイパーボール並等々。カントーのマサラタウン出身の母とホウエンのキンセツシティ出身の父を持っている。２人は今は、アローラで仕事中。そのため、今はウツギ博士の研究所で寝泊まりをしている。相棒はヒノアラシのヒノタロー。コガネエレブーズのファンで、応援歌を歌えることはもちろんのことグッズもたくさん持っている。夢は世界中のポケモンをゲットし、自身で書いている図鑑を完成させること。黒髪に若干緑がかった黒目をしており、プレミアムボールカラーのキャップに、ハイパーボール柄の半そでのジャージを羽織っている。中に着ているＴシャツにはメガストーンの絵が描かれているが、本人はそれが何なのかを知らない。パンツは、レッドと同じ感じ。バトルの腕も高い。年齢は１０歳（１話時点）

手持ち：ヒノタロー（ヒノアラシ）・オータロー（オタチ）・？・？・？・？・？・卵（？）

イブシ…ワカバタウン出身の中二癖のあるポケモントレーナー（う～ん、どこかにそんな奴いたような）。特性頑丈なんか目じゃないほどの頑丈な奴。相棒は、ワニノコのクロコ。エンカのライバル。使用ポケモンは、みず・いわ・こおりが多い。親は２人ともジョウトのコガネシティ出身。口癖は、「見せてやる、ジョウトに輝く俺たちの力！」。エンカと同じく重度のエレブーズファン。子供のころ、森の奥で伝説のポケモンであるスイクンにあったことがある。バトルの腕は高いものの、料理の腕はいまいち。夢は、最強。青味を帯びた黒髪（髪型はＮと似ているが縛った部分が腰くらいまである）と黄金色の

目をしており、ポケスペのシルバーの格好をしている（しかし、上着は赤の部分が金色になっており、前を開けていて水ｚの模様のシャツを着ている。）。年齢は１０歳（３話時点）

手持ち：クロコ（ワニノコ）・ジャック（オニスズメ）

ウツギ…ジョウト地方のポケモン研究家。妻子持ち。みんなからはウツギ博士、もしくは博士、と呼ばれている。御三家を渡す役割も持っている。研究内容は、ポケモンの卵と連れ歩き。持っているポケモンは全てベイビィポケモン。エンカの両親とは旧知の中で、出張の際にはエンカをよく預かっている（出立時もそうだった）。研究室に籠りっぱなしのもやしっ子。「卵の研究者（神秘）」と呼ばれる。年齢は３２歳（１話時点）

手持ち：トゲピー・ソーナノー・ルリリ・エレキッド・ブビィ・ピチュー

ボックス：ピィ・ププリン・バルキー・スボミー・リーシャン・ウソハチ・マネネ・ピンプク・リオル・ゴンベ・タマンタ

ルチア…ホウエンのルネシティ出身のトップコーディネーターを目指す少女。本作メインヒロイン。チルットのチルルがパートナー。一人称は、私。まだテレビに出れるほど、有名でない。エンカには初めて会った際に、一目惚れする。叔父にルネジムのジムリーダーで、コーディネーターのミクリがいる。旅する時は、ＯＲＡＳのハルカの水色版の服を着ている（ポケスペのサファイアみたいな）。ただし、髪型はそのまんま、アクセサリーとバンダナは無し。年齢は１０歳。

手持ち：チルル（チルット）

オダマキ…ホウエン地方のポケモン研究家。娘にサファイア、旧友にセンリがいる。フィールドワークのしっぱなしで、よくポケモンに襲われる。趣味は、おいしいものを食べること。研究内容は、ポケモンの生態系。小太り。「追いかけまわされるお家芸」ではなく、「生態系のスペシャリスト」であるのでお間違え無く。年齢は３５歳（６話

時点）

サファイア…オダマキの娘。のちに、エンカたちにあこがれ旅に出る。年齢は８歳（６話時点）。

手持ち：どらら（ココドラ）

レイジ…シンオウのトバリシティの育て屋。相棒はムクホーク。カントー、ジョウト、ホウエン、シンオウの４地方のジム制覇に加え、バトルフロンティア８では６つのシンボルを手に入れている凄腕トレーナーだったが、今は引退している。理由は、ジンダイに負け自分はどういったトレーナーなのかがわからなくなり諦めてしまった。しかし、今は後輩トレーナーの育成に力を入れている。エンカは、その才能を見出されたものの一人。そのため、結構なついている。弟からは慕われていないらしい。「元天才トレーナーの育て屋」。年齢は１７歳（９話時点）

手持ち：ムクホーク・マルノーム・ドラピオン・ビーダル・コロボーシ

ボックス：???????

スイジン…エンカの祖父。キンセツシティに住んでいる。海の民を束ねている、クスノキ館長の依頼で、生まれたカイナシティに住んでいる。水タイプ使い。全盛期は、世界でも１０の指に入るほど強いトレーナーであった。

手持ち：イオ（フィオネ）、サメハン（サメハダー）、ニッパー（ペリッパー）、チョーチン（ランターン）、イテツキ（ネイティ）

コゴエ…エンカの祖母。主に氷タイプを使う。怒るとものすごく怖い。

手持ち：タマ（タマザラシ）、チャーミー（スターミー）、マシュ（クマシュン）

ジョーイ、ジュンサー、レイジの弟は、別の時に登場。

１話　ｖｓヒノアラシ～仲間との出会い。新たなる旅立ちの始まり～

「ポケットモンスター」

縮めてポケモン。この星の不思議な不思議な生き物。空に山に海にポケモンはいたるところでその姿を見ることが出来る。その種類は、１００、２００、３００、いや、それ以上なのである。

この少年・ワカバタウンのエンカ。相棒のヒノタローと共にバトル＆ゲット。目指すは、すべてのポケモンを自分の目で見て、自身の図鑑を完成させること。ポケモンの数だけの出会いがありポケモンの数だけの別れがある・・・・・・。

これは、エンカが様々なトレーナーとポケモンと出会い成長していく物語、のはずだ。

ジリリリリリリリリリ　ジリリリリリリリリ

ここは、朝早くの「始まり告げる風の町・ワカバタウン」。そこに目

覚ましのベルが鳴る。そのベルによって起きた少年、名をエンカ。歳は１０歳である。エンカは、カントーのマサラタウン出身の母とホウエンのキンセツシティ出身の父を持っている。２人は今は、アローラで仕事中。そのため、今はウツギ博士の研究所で寝泊まりをしている。

今日は、エンカにとって特別な日。何故かって？そりゃあ今日は…

「うわぁ！早くしないと、もらい損ねちゃうよ！」

急いで起き上がると、すぐに下の階へ急ぐ。

「博士！まだ、だれも来てませんか？」

「ああ、来ていないよ。君が最初の一人さ」

そうエンカに伝えた白衣を着た男性―ポケモンの卵と連れ歩きについての研究の第一人者・ウツギである。

「よかったー。俺、どうしてもこいつが欲しくって！」

そう言ってボールを取る。その中に入っているポケモンは

「出て来い！俺の相棒！」

「ヒッノーー！」

繰り出したポケモン、それは

『ヒノアラシ。ひねずみポケモン。タイプ・ほのお。臆病で、いつも体を丸めている。襲われると、背中の炎を燃え上がらせ、身を守る。怒った時、驚いた時、背中から炎が吹き出す。吹き出す炎は、怒った時が一番強く燃え上がり、敵を驚かせる。』

「だね。」

と図鑑本を使い説明を博士がする。

「はい！」

「ヒノオ？」

ヒノアラシは、よくわかってないみたい。

「その子の名前とかって決めるの？」

「はい！ヒノタローです！よろしくな、ヒノタロー！」

「ヒッノー！」
　そうして、ヒノアラシのヒノタローをゲットしたエンカ。彼の冒険は今始まっ
「あ、博士！今から、道具買いにヨシノシティに行くんですけど」
　・・・・・・始まるのはもう少し先のようだ。
「じゃあ、この卵を卵爺さんのところからもらってきてくれるかい？なんでもシンオウ地方で新たな進化が確認されたとかで…」
「！そんなポケモンがいるんですか？」
「ああ。そのポケモンは、トゲピー。こちらで研究しようと思っているんだ。シンオウ産の卵じゃないと進化しないのか、それともジョウトの卵でも進化するのか。まさに卵には未知なる世界が広がっているよ！」
　コマンド1　逃げる　コマンド2　話を聞く
　エンカは、逃げるを選択した。
「あ、急ぎで行きたいんで、また今度でお願いします！」
　そういうと、博士は自分が熱中していたことに気が付いたようだ。
「そうだね。ならこれらを持っていきなさい。使い方は、分からなかったら説明書を読んでね」
「はい！」
　エンカは、モンスターボールを5つ手に入れた。ジムバッジの収納ケースを手に入れた。
「これくらいでいいかな。ポケギアとお金、手製の図鑑は、」
「ちゃんとあります！ポケギアの機能に通帳があるので、なくしたら大変ですけど」
「そうだね。じゃあ、行ってらっしゃい」
「行ってきます！」

よう！俺、ワカバタウンのエンカ！こっちは今しがた仲間になったヒノタロー！俺は今、ヨシノシティに向かうため、２９番道路を走っている最中だ。
ガサガサ
突然、草むらが揺れる。
「タァチィ！」
「あいつは！」
草むらから出てきたポケモンを本で調べる。
『オタチ。みはりポケモン。タイプ・ノーマル。遠くまで見れるように尻尾を使って立つ。敵を見つけると、大声で仲間に知らせる。警戒心がとても強いポケモン。』
「やっぱり、オタチか！行くぜ、ヒノタロー！君に決めた！」
「ヒッノォ――！」
「ヒノタロー、ひのこ！」
バトルの基本は、先制攻撃と相性を考えること、そして技をどうやって使うか。そういうことだと俺は考えている。
「タチィ！」
オタチがダメージを受ける。
「続けてたいあたりだ！」
「ヒノォ」
「タァ！」
オタチがふらついた。じゃあ、ゲットしますか！
「行けっ！モンスターボール！」
トゥルン、トゥルン、トゥルン、パン！
「よっしゃ！オタチゲットだぜ！」
「ヒノ！」
早速オタチを出してみることにする。
「出て来い！オタチ！」
「タチ！」

「よろしくな、今日からお前はオータロー。俺のポケモンだ！」
そういうと、オタチはうれしそうに頷いた。
さて、そろそろ本来の目的地であるヨシノに向かいますか！

２話　ｖｓオタチ～タマゴ、ゲットだぜ！～

オータローをゲットしてから２時間後、ヨシノシティに到着しました。オータローが近道とトレーナー、スピアー、オニスズメらのいない場所を知っていたからだな。まぁ、気性が荒いだけで害ポケ扱いしちゃかわいそうだけど。グッジョブ、オータロー！

長かった。ここは「花の香り漂う街・ヨシノシティ」。「案内爺さん」と呼ばれるインナイさんの家や、ポケモンセンター（以下ポケセン）、フレンドリィショップ（以下ショップ）などがある。ちなみに、インナイさんは昔は凄腕のエリートトレーナーだったらしい。あんな図々しいじじいがほんとにそうだったんだろうか？

町の北にある湖や南にある海では、メノクラゲやコイキング、サニーゴにヒトデマンなどを見ることができる。特にヒトデマンはレアなポケモンで、進化後のスターミーは大変強力だ。

俺がここに来た理由は、ショップでモンスターボールを買い足すためである。１０個買うと１つプレミアムボールのおまけがつくのだ。ひとまず２０個買うとするか。あっと、その前にポケセンで回復回復！

※この世界でのポケセンはアニポケと同じように治療や回復に時間がかかるし、捕獲率も大体同じである（エンカは特殊例）。

※ボールもかさばる。一度投げて捕獲に失敗しても、壊れない限り使える（水の中、岩山などだと、壊れやすい）。水中にはダイブ・ルアーが強く、岩には特に強いボールはない。高いほど、頑丈。マスターボールは壊れない。

回復が終わった後、ポケセンを出て、ショップへ向かう。
「すみませ～ん！」
「本日は何をお探しですか？」
「モンスターボールを買いに来ました。２０個お願いします。後、宅配物の受け取りをお願いします」
「わかりました。では、トレーナー許可証をこちらにご提示ください」
そういわれたので、俺はポケギアを出す。ポケギアには、通帳機能や電話・メール機能、トレーナー許可証など様々なデータをアプリとして入れることができる。ポケモン図鑑？あれは開発中だったはずだけど。
「２６２５円になります」
この世界には、トレーナー税というものがあってトレーナーの道具（モンスターボールやきずぐすりなど）には、５パーセントの税がつくのだ。
「ギアでお願いします」
そのままポケギアを出す。そこに特殊な機械を当て、会計終了。
モンスターボール２０個とプレミアムボール２個、そして旅の基本となる帽子とグローブ、リュックサック（なんとモンスターボールの構造を模して作ったらしく、質量、重さに関係なく入れられる）とスニーカーを手に入れられた。

えー、今福引所の前にいます。なんでも今、１０００円買う毎に一回福引が引けるそうです。
景品
１等　ホウエン地方への船旅（往復）
２等　げんきのかけら
３等　ハイパーボール
４等　いいきずぐすり

５等　スーパーボール
６等　モンスターボール
７等　ティッシュ
一等とそれ以外の差がやばい。え、１等が５万くらいなのに、２等が１５００円、３等で１２００円、４等で７００円・・・。２等以降は馬鹿にしてんのかよ！と思いつつ、俺は１等しか当てられないなと思う。だって俺、福引で１等以外を引き当てたことは、１等がなくなった時だけだもん。

ガラガラ　ガラガラ　ッポン！

金の玉。１等です。ちなみにもう一つは、銀の玉のげんきのかけらでした。うわー、これ売ったらたくさんのボールが手に入るよー（笑）！たまには、ティッシュとか当てて―（棒）。

そのあとすぐに、ポケセンに戻る。さすがに今日は疲れたし。明日タマゴもらった後、もう一度ここに泊まってから帰ればいいか。ポケセンの宿泊施設は無料だし。

朝になりました。昨日手に入れた道具をリュックの中に詰めたり、着たりする。ちなみに今まで使っていたディバックもリュックの中だ。ワカバに帰ったらおいてこよっと。

さぁ、今日も出発……え？淡々と進みすぎ？一人しかいないし、ヒノタローたちと喋りながら行くと、五月蠅いってことで野生ポケモン怒らせたくないし、仕方ないだろ？
「ちょっと、そこのトレーナーさん！」
うわ、出たよトレーナー。でも、俺のことじゃない。目ぇ合ってないし。目を合わせなければバトルは開始しない。
「なんで無視するのよ！」
ねぇ？俺なの？と思いつつ、うざったいので無視。今はウツギ博士の依頼を終わらせることが先決。
「待てい！」
ついには掴みかかろうとしてきたので、転んだふりをして受け身を取ってかわす。
「気づいてんじゃん！」
知らん。俺は知らん。
「出てきて、リーシャン！」
「シャリリリーン！」
リーシャンか。実物は見たことがないからな。観察させていただこう。
「へ？リ、リーシャン？珍しいなぁ。ねぇ、観察させてもらってもいいかな？俺はウツギ博士の助手をやってるんだ」
作戦1。一気にまくし立てて観察させてもらって逃げる。
「え？ウツギ博士の助手さんなの？すごいわ。でもそういうことなら、ポケモンを持ってるでしょう？ポケモンバト」
「あ！やばい！ウツギ博士に頼まれていた仕事があるんだった。忙しいから今度ね！それじゃあ！」
作戦2　まくし立てて逃げる。
え？悪いことじゃないかって？俺は一刻でも早く旅をスタートさせたいから、早く仕事を済ませたいだけなのになぜダメなんですか～？

そんなこんなで、３０番道路のタマゴ爺さんの家に来ました。いや、長かった。早く帰って、ホウエン行って、向こうのポケモン数匹捕まえて、こっちに帰ってきたいもんだぜ。
「こんちわ！エンカです！ウツギ博士のおつかいに来ました！」
そういって、門をたたくと、中から卵を二つ持った老人が現れた。
「おお！まっとたぞ！ほれ、こいつがトゲピーのタマゴじゃ。そして、わしの弟がやっている育て屋で見つかったタマゴもやろう」
太っ腹！
「ありがとうございます！でもいいんですか？」
「いいんじゃよ。新人トレーナーを育てるためには安すぎる投資じゃよ」
「はあ」
「そいつは、何が生まれるかは自分で確かめい。強いポケモンが生まれるといいのぉ」
「そうですね。自分、運がいいほうなんで、つっよいポケモンが生まれてくれるって信じてます」
「そうか、そうか。では、割らないように気をつけて帰りたまえ」
「はい！ありがとうございました！」
ってことでミッション終了。オータローのおかげでさっきのトレーナーに合わずにヨシノシティまで帰れたことだし、明日に備えて寝ますかね。じゃ、Ｇｏｏｄ　ｎｉｇｈｔ！